静　岡
SHIZUOKA

世界の花が咲き誇る「浜名湖花博」

静岡県の浜名湖ガーデンパークで、4月8日から10月11日までの187日間、「花・水・緑～新たな暮らしの創造～」をテーマに、「浜名湖花博」（しずおか国際園芸博覧会・パシフィックフローラ2004）が開催されている。6月20日には早くも来場者が250万人を突破し、好評を博している浜名湖花博は、国際園芸家協会（AIPH）が承認する国際園芸博覧会で、「大阪花博」、「淡路花博」に次ぐ日本で3回目の国際花博である。

風光明媚な浜名湖畔の約56haの広大な会場は、園路勾配を4％以下にするなど、だれもが快適に過ごせるユニバーサルデザインを採用している。花博会期中、5回の植え替えが行われ、季節に応じ、6,000品種、500万株の草花の花景色を満喫できる。

「花の街」では、花と音のシンフォニーに包まれる「ほほえみの庭」、世界のトップガーデナーが競う「ワールドガーデンコンペティション」、山本寛斎プロデュースの「煌めく未来の庭園」のほか、花緑いっぱいの巨大温室「花みどり未来館」、「浜名湖館フルレ」、「浜松産業館E～RA」、「しずおかふるさと館」「JAとぴあ浜松館　はなとぴあ」などのパビリオンも充実している。

南北水路を渡ると「水の園」。「庭文化創造館」では各界のトップクリエイターが創造的な庭づくりに挑戦し、「国際花の交流館」では花と緑のさまざまなアート作品が

披露され、「水辺の劇場」や「のたねステージ」では連日華やかなイベントが開催されている。会場中央に位置する高さ50mの「きらめきタワー」からの眺望も絶景だ。

そして、会場の奥に広がる「緑の里」。印象派の巨匠モネの家と庭を再現した「花の美術館」、伝統園芸植物や盆栽を展示する「園芸文化館」、昭和天皇の植物標本等を紹介する「昭和天皇自然館」のほか、世界の24の国と地域を周遊できる「国際庭園」や、世界の5,000品種、50万株の植物を展示した「百華園」などなど、自然と伝統、文化を堪能することができる。

さらに、生きた化石といわれる「ジュラシック・ツリー」、『星の王子さま』に登場する「バオバブ」、世界三大花木の「ジャカランダ」、“青いバラ”といわれる「ブルーヘブン」など、世界の珍しい花や木が一堂に会する浜名湖花博は、まさに、今世紀最大の「ガーデンアイランド」となっている。

神奈川
KANAGAWA

横浜、東京港がセットでスーパー中枢港湾に決定

横浜、東京両港が「京浜港」というくくりで「スーパー中枢港湾」に指定されることが5月、国土交通省のスーパー中枢港湾選定委員会の最終会合で事実上決定した。今後、港湾コストの削減、国際コンテナターミナル機能の充実、情報技術（IT）化などをさらに進め、「東アジアのハブポート」としての地位確立を目指す。

今秋に全面供用される高規格コンテナターミナル「本牧ふ頭ＢＣ突堤間」

コンテナ取扱量で見ると、日本の港湾は東アジアの港湾に大きく水を開けられている。2003年の実績では、横浜、東京両港を合わせても約575万個（20フィートコンテナ換算）で、10位にとどまる。これに対して香港は2,010万個で、堂々のトップ。また1位から6位までが東アジアの港湾で占められ、うち半数は中国の港湾だ。

この背景には、東アジア各国の経済発展に伴う貨物発生量の増加とともに、輸送効率の向上を狙って基幹航路の寄港地を絞り込む大手海運会社の戦略がある。北米や欧州に直接向かわず、積み替えのために日本から香港、上海、釜山などに運ばれるトランシップ貨物の比率は、1998年の5.3％が2003年には15.4％へと急上昇している。

スーパー中枢港湾は、重点投資や規制緩和によりハード、ソフト両面から世界水準の港湾整備を進め、基幹航路のコンテナを奪還しようというもの。国土交通省は2002年10月、選定委員会を設けて指定候補を公募。各港湾から出された育成プログラムなどを評価し、京浜港、伊勢湾（名古屋、四日市両港）、阪神港（大阪、神戸両港）を指定対象に決めた。

京浜港は、今秋に全面供用される高規格コンテナターミナル「本牧ふ頭ＢＣ突堤間」を一体的に運用する民間ターミナル運営会社の進出を待って、今夏にも正式指定される。育成プログラムには2009年をめどに、港湾コストを約3割削減して釜山港や高雄港と同レベルにすることや、コンテナ港の入港から輸入貨物引き取りまでの時間（リードタイム）を現状の3～4日から1日程度にまで短縮してシンガポールと同レベルにすることなどが盛り込まれている。